9月12日(土) 実践報告第6室 (T208)

英語と文化の多様性を認識するためのPre-reading Activities

Pre-reading Activities to Understand English and Cultural Diversity

和田 千波留 (文教大学)

伊藤 晶子 (相模女子大学)

はじめに

言語習得の場に、コミュニケーション能力育成という目標が掲げられて久しい。実際にコミュニケーションをはかるためには、相手の文化的背景を理解することが不可欠であるわけだが（異文化間コミュニケーション）、どうしても英語圏の国々の文化や英語志向になりがちである。しかしながら英語には世界の公用語としての側面があり、英語圏ではない文化的背景を持つ者同士が、英語でコミュニケーションをはかる場合も多い。ゆえに、学習者に「英語を母語としない人々が話す英語」と、「それらの国々の多様な文化」に触れる機会を与えることは意義あるものといえる。

1. 授業の方法と目的

私たちはこの試みを異文化理解をコンテンツとした読解の授業で、pre-reading activitiesとして導入している。形態としては、これから読もうとする内容に関する質問をあらかじめノン・ネイティブスピーカーにインタビューし、ビデオに録画もしくはオーディオテープに録音しておく。（例えば、各国におけるジェスチャーなどの非言語コミュニケーションの違いについて読む場合、その国では、"Come here." "I don't know." "No."などをどのようなジェスチャーで表現するのか口頭で説明してもらった後に、実演してもらう。）なお、スピーカーは数カ国にまたがるのが望ましい。読解前にタスクを与えながら、このビデオを見せる（テープを聞かせる）ことで次の目的を果たすことができると思われる。

- (1) 読み手の興味と関心を引きつける。特にビデオは視覚に訴え、活字離れが著しいといわれる昨今の学習者を引きつける要因となる。
- (2) 読み手の背景知識を活性化する。(top-down view of reading)
- (3) Listening comprehension を通して、1) 内容理解から文化の多様性を認識することができる、2) 音声面ではノン・ネイティブスピーカーの特徴のある英語に慣れることができる。
- (4) 読解の授業にリスニングを持ち込むことで (post-reading activities でも工夫ができる)、より自然な言語学習環境（四技能統合）にすることができる。

本発表では実際に収録し、使用したインタビュー・ビデオの一部をご覧になっていただきたい。

9月12日(土) 実践報告第6室(T208)

2. Pre-reading activities の実施

2-1. 対象者

YMCA 語学・ビジネス専門学校、相模女子大学、神奈川大学その他1, 2年
約300名(YMCA 日本語学科の留学生の協力を得て行った。)

2-2. 実施手順

- (1) これから読もうとする本文の内容に関して、外国人留学生(中国・台湾・香港・韓国・ベネズエラ等)に対してインタビューを行い、それをビデオに録画する(オーディオテープに録音する)。
- (2) タスクを与え、(インタビューの内容の gist を取る、音の違いで気づいた事をメモする、分かった言葉を抜き出してメモする等) 学生たちに、本文を読ませる前にそのビデオを見せる(オーディオテープを聴かせる)。
- (3) タスクの答え合わせをし、必要に応じて教師が補足説明を加える。

3. 学生の反応

3-1. アンケート調査の実施

幾つかの項目について五段階で評価させ、その他自由に気づいた事、感じた事等をコメントさせ、回収した。

3-2. アンケート調査の結果

概して好意的、肯定的な回答が多かった。

4. 考察

今回の試みでは pre-reading に関しては、前述の目的を果たす事ができたと言ってよからう。一方、様々なノン・ネイティブスピーカーの英語に触れさせるという点に関しては、今回のインタビューに協力してもらったのが、日本語学校の留学生だけであったため、年齢や地域的な偏りからどうしても免れ得なかった。その為、多様性という観点からいうと、今後の課題として残される。さらに、何人かの学生からネイティブスピーカーの英語ですら分からないのに、といった困惑の声も聞かれた。しかしながら、グローバルな視点に立って物を考える人間の育成という観点からすると、英語を international communication の一手段として認識し、英語学習に対して柔軟な姿勢を持つように学生たちの意識を切り替えて行く必要を感じる。その点に於いては、音声面においても文の構造においても様々な地域の英語(母語の影響を受けている英語)に接する機会を与える事は、意義のある試みであったと言って良いのではなかろうか。